

落窪物語 ～姫に幸せを運んだ女 あこぎ～

国語班：奥田依吏子 十倉瑠香 長岡朋恵 松内菜々

1. はじめに

私たち国語班は古典文学の研究をするにあたって「継子物語」にジャンルを絞り、日本最古の継子物語であるとされる落窪物語を取り上げた。落窪物語は他の継子物語と違い、脇役の活躍が大きく描かれている。その中でも、物語の各場面で主人公落窪姫を助ける女房あこぎの活躍の理由に興味を持ち研究した。

2. 継子物語とは

後妻が主人公である継子(後妻と血の繋がっていない子)に対して虐待、冷遇等のいじめを題材とした物語または説話である。私たちになじみ深い『シンデレラ』は西洋の継子物語にあたる。

主人公である継子は継母に無理難題を与えられるが、周りの助けを借り幸せになるといった結末が多くみられる。

3. 落窪物語の概要

全四巻で構成される。作者は源順説が有力だが諸説あり未だ不明である。十世紀末に成立したとされる。女房などの侍女階層の描写が多いことその他にいじめを行った継母に対する復讐が痛快に描かれていることも物語の特色である。

4. あこぎの活躍と一生

あこぎは姫の母親が存命の時から後見として姫に仕えていた。成人すると、後に姫の夫になる道頼の部下であり乳母兄弟である帯刀と結婚する。夫の協力を得ながら、道頼と姫の仲を取り持つのに尽力する。継母にいじめられ、軟禁された姫を救出する際にも継母を姫に近づけさせないようにして道頼が姫を救出しやすいようにするなどの優秀な働きをする。

道頼、姫とともに新居に引っ越した後あこぎは人脈を駆使し女房を新居に集め、彼女らを指導し屋敷を整えさせた。この頃、あこぎは衛門に出世する。姫に子どもが生まれ安定したのを機に道頼による継母への復讐が始まる。あこぎは姫のためにその復讐に積極的に協力する。最終的に姫の実家と和解し、幸せに暮らした。

あこぎは最後には内侍のすけにまで出世し二百歳という長寿を全うした。

5. あこぎの人物像

- ・明るく聡明で気のきく女性
- ・感情表現が豊か
- ・周りの人々に好かれており、人脈が豊富
- ・自分の身をかえりみず自分の大切な人のために勇気ある行動をとる
- ・夫 帯刀に対しては女性らしさを見せる

6. 仮説と検証

仮説① [作者があこぎと近い身分の女性だったのではないか]

作者は下級貴族の男性と推定される。その根拠としては本文中に当時の女性が使われないような露骨な表現が多用されていること、物語が中国の作詩法と同じ起承転結の構成をとっていることから作者に漢詩の素養があること、が挙げられる。

以上よりこの仮説は否定される。

仮説②[当時の読者があこぎやそれ以下の侍女階層であったのではないか]

物語の最後の文にあこぎの一生についての記述があることから読者の目を気にした作者が読者と近い立場のあこぎを最後に登場させたのではないかと推察される。また、あこぎに限らず姫や道頼に仕える低い身分の視点や心理描写が多々ある。他に、当時の上流階級で教育によくないと禁止されていた恋愛についての描写が見られる。

以上よりこの仮説は正しいと考えられる。

7. 考察

分析の結果、当時の読者層があこぎに近い身分の女性達であったと考えられ当時の読者が感情移入しやすいようにあこぎという人物が描かれているのではないかという考えに至った。

8. 参考文献ならびに参考Webページ

三谷栄一 三谷邦明 稲賀敬二 新編日本古典文学全集 落窪物語 (小学館)

黄地百合子 御伽草子と昔話 日本の継子話の深層 (三弥井書店)

清水一人 増補新版昔話に見る悪と欲望 一継子、少年英雄、隣のじじい (青土社)

日本文学研究資料刊行会 平安朝物語Ⅲ (有精堂)